

京都国立博物館

だより

二〇二四年
一・二・三月号

KYOTO NATIONAL MUSEUM

2024 January to March, vol. 221



新春特集展示

辰づくし—千支を愛でる—

特集展示

弥生時代 青銅の祀り

修理完成記念 特集展示

泉穴師神社の神像

特集展示

雛まつりと人形—古今雛の東西—

「予告」特別展

雪舟伝説—「画聖」の誕生—



【新春特集展示】

辰づくし

千支を愛でる

令和6年1月20日(火)

2月12日(月・休)

〔平成知新館 2F・2〜4〕

令和6年の「千支を愛でる」もファミリー向け！

作品を見るのが楽しくなるワークシート(小学校低学年)

やさしい解説文(小学校高学年)



重要文化財 龍虎図屏風(右隻) 狩野山楽筆 京都・妙心寺



龍袍 金黃地緞織 西田善蔵コレクション 京都国立博物館

令和六年の千支は辰(龍)ですね。十二種類の千支の生き物の中で、龍だけは想像上の生き物です。でも昔の多くの人は、その存在を信じて、瑞獣(特別な時に現れるめでたい生き物)だと考えてきました。

1 龍の姿

誰もその姿を実際に見たことがないのに、みんな龍の姿を知っています。でも、時代や地域、作る人によって、龍の姿は少しずつ違いました。どんな姿で表されてきたのか、見てみましょう。

2 龍はリーダー！

龍は、鱗のある生き物たちのリーダーだと考えられました。雲や水をあやつる不思議な力をもった龍は、力があつた人のしるしになります。中国では皇帝が使うものに、五本爪の特別な龍が描かれました。



双龍花鳥時絵螺鈿縫道具入 京都国立博物館

4 龍の物語

龍は、昔の物語の中にもよく登場します。人間と龍は、どんな関係だと思われてきたのでしょうか。

5 龍の仲間

龍に似ているけれど、ちよつと違う生き物も、美術の中には登場します。どんな特徴があるのか、観察してみましょう。

実際に見ることができないからこそ、龍を描く人たちは想像力を働かせ、個性豊かな龍たちを生み出してきました。あなたのお気に入りを探しに、ぜひ博物館に遊びに来てください。(水谷亜希)

3 龍を描く

龍を描く時には、おきまりの組み合わせがいくつかありました。「昇る龍・降りる龍」「雲と龍」「龍と虎」などです。この部屋には、どんな龍がいるのでしょうか。



昇龍墨意 須磨帖のうち 高奇峰筆 須磨弥吉郎氏 収集・須磨未千秋氏寄贈 京都国立博物館

弥生時代 青銅の祀り

【特集展示】

令和6年1月2日(火)〜2月4日(日)

〔平成知新館 1F・2〕

青銅器は、鑪を使用して炉で銅鉱石を高温にし、熔けた銅を坩堝で鑄型に流し込む「鑄造」と呼ぶ技術で造られています。このとき、錫と鉛を混ぜた合金(青銅)にすることで、硬さの調整や色調も金色に近い色などにすることが出来ます。古代東アジアでは、中国の青銅器文化は酒器・食器や鼎などの調理に使用する大型容器類が多いことが特徴で、祭祀において食物を神や祖先に供献する道具として発達しました。

一方、弥生時代の青銅器は、日本列島では弥生時代前期の終り頃頃に大陸から鉄器とほぼ同時に伝わり、国産化とともに大型化して実用の鉄器に対して祭器として発達しました。主に銅剣・銅矛・銅戈などの武器形青銅器と銅鐸があり、前期末頃から後期まで祭祀に使用された道具と考えられています。

このうち、武器形青銅器は九州地方、銅鐸は近畿地方を中心にそれぞれ異なる分布圏を示し、各地では地方色を備えた多様な展開をみせることも注目されてきました。しかし、顕著な地方色があるにもかかわらず、これらの埋納状態は類似した特徴があり、武器形青銅器の場合は刃部を上下に立てて埋納され、銅鐸も鐸部を上下に立てて埋納されています。これは青銅器の祀りがある程度共通した世界観の下に行われていたことを窺わせています。このように弥生時代の青銅器は大陸に起源をもちながら日本列島で独自の変化を遂げ、祀りの重要な道具として発達したと考えられます。

本展では、これまで公開の機会が少なかった京都国立博物館蔵の弥生時代青銅器をすべて展示して御紹介します。また、弥生時代青銅器の祀りに焦点をあて、文化庁所蔵品や寄託品も併せて展示し、弥生時代の青銅器文化の特色と展開を考えます。

(古谷 毅)



- 1 重要文化財 流水文銅鐸 徳島県阿南市山口町末広(田村谷)出土 文化庁
- 2 六区装袈裟文銅鐸 愛知県豊川市御津町豊沢出土 文化庁
- 3 六区装袈裟文銅鐸 和歌山市弘西橋谷出土 京都国立博物館
- 4 重要美術品 流水文銅鐸 京都府与謝郡与謝野町明石 須代神社境内出土 京都国立博物館
- 5 四区装袈裟文銅鐸 出土地不詳 京都国立博物館
- 6 四区装袈裟文銅鐸 推定和歌山県出土 京都国立博物館
- 7 六区装袈裟文銅鐸 出土地不詳 京都国立博物館
- 8 四区装袈裟文銅鐸 出土地不詳 京都国立博物館
- 9 四区装袈裟文銅鐸 大阪府岸和田市流木町出土 京都国立博物館
- 10 銅矛 大分県臼杵市下北津留字中尾坊主山出土 京都国立博物館
- 11 銅矛 熊本市北区植木町轟今古閑出土 京都国立博物館
- 12 銅剣 大分市浜出土 京都国立博物館
- 13 銅剣 愛媛県西条市丹原町古田出土 京都国立博物館
- 14 銅戈 熊本県菊池郡大津町真木西津留出土 京都国立博物館
- 15 銅戈 福岡県筑紫野市二日市出土 京都国立博物館

1月からの 平成知新館 名品ギャラリー

3F-1 陶磁

【日本と東洋のやきもの】

1月2日(火)〜3月17日(日)

※3月19日(火)から3月24日(日)は閉室。

3F-2 考古

【平安時代人の祈り―経塚と経筒―】

1月2日(火)〜3月17日(日)

※3月19日(火)から3月24日(日)は閉室。



◆京博ナビゲーター再始動！
活動を休止していた京博ナビゲーターが令和6年1月より再始動します！館内のミュージアム・カートで、文化財の複製や材料に触りながら、京博ナビゲーターと楽しくお話ししませんか？活動場所や日時など、最新の情報は当館公式ウェブサイトをご確認ください。

【修理完成記念 特集展示】

いずみ あな

泉穴師神社の神像

令和6年1月2日(火)～2月25日(日)
【平成知新館 1F-1】

日本において神は森羅万象に宿り、巨石や山、鳥などの自然物、あるいは剣や鏡などを依代よりしろとしました。姿かたちのない不可視の存在であった神の像が刻まれるようになったのは、仏教との習合が契機であったと考えられています。

仏像は仏の像容を仰ぎ拝むために、仏教の教義のもと造られるので、視覚的な効果が重視されます。仏像は姿によって何の像であるか判別できることが多いのですが、神像の場合は男神か女神かといった種類の区別がつくだけで、見た目の特徴で神格を判断できるのは稀です。神像は仏像とは違い、造られたあとは社殿の奥深くに秘められて、その姿が人目に触れることはありませんでした。小さな像が多いのも、人目に触れず帳の中に取りまことを前提としていたからでしょう。人の姿で造られても、神像は剣や鏡と同様にそこに坐す神の依代であったのではないかと思います。

今回の特集展示では、泉穴師神社に伝わる神像八十三軀のうち二十六軀を紹介いたします。神像彫刻は側面から見ると極端に薄く、膝の張り出しをほとんど造らず、衣文の造形は簡素にとどめるなど、仏像とは異なる造形意識であることがわかります。人間と同じ姿を持ちながら、現実味のない身体表現をとるところは神像ならではの神秘的な特徴です。閉ざされた環境のなかで長い年月を過ごしてきた神像が腐朽や虫蝕の危険に耐えて現代まで残り、修理を経て展観されるまたとない機会です。多くの方にご覧いただくと幸いです。

(竹下蘭子)



重要文化財 神像 大阪・泉穴師神社

【特集展示】 雛まつりと人形

—古今雛の東西—

令和6年2月10日(土)～3月24日(日)

【平成知新館 1F-2】



京風古今雛 玉城芳江氏寄贈 京都国立博物館

本年もまた、雛人形を飾る時節がめぐってきました。博物館の展示では、衣服や毛髪の素材、顔立ちや姿かたちによって雛人形を分類し、「寛永雛」「享保雛」「次郎左衛門雛」「古今雛」などと称して紹介しています。これらの分類名称の多くは近代の人形史研究の中で生まれたものですが、このうち「古今雛」の由来については、安永年間(一七七二～八二)、江戸十軒店の人形師・初代原舟月が創案し、寛政年間(一七八九～一八〇二)頃、二代原舟月が完成させた江戸生まれの雛人形によること、大和郡山藩主で隠居後も江戸に暮らした柳沢信鴻(一七二四～九二)の『宴遊日記』や、江戸の雛人形商の業務記録「雛仲間公用帳」などの同時代資料から確認できます。

一般的に古今雛の特徴は、写実的な容姿と、女雛の袖口から単ひとえを大きく見せ豪華な天冠を添えるなど、華麗な仕立てにあるとされています。江戸での流行を受け、京都を中心とする上方においても古今雛を参照した品が製作されたと考えられています。

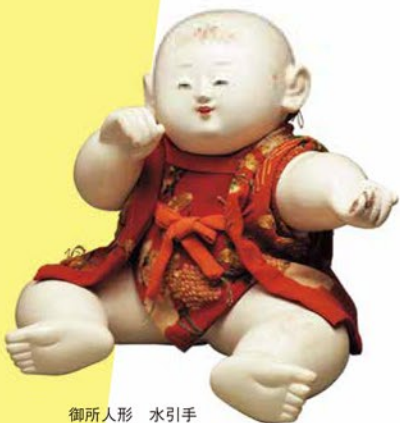
上方で製作されたとおぼしき古今雛は、江戸では一般的な瞳にガラスを入れる玉眼ではなく筆で描く描き目が主流で、江戸の古今雛の特色は必ずしも反映されていません。当館が所蔵する古今雛は、すべて上方の旧家から寄贈を受けた品ですが、多くが描き目で京都周辺の製作と考えられることから、近年は「京風古今雛」として展示してきました。

それでは、江戸で流行したという「古今雛」とはどのような雛人形だったのでしょうか。その本来の姿を探るため、本展では、近年新たに発見された二代原舟月作とみなしうる古今雛飾りを紹介します。当館が所蔵する京風古今雛と並べてご覧いただくことにより、江戸と上方、それぞれの土地の好みを感じていただければ幸いです。

(山川 暁)



古今雛飾り(部分) 二代原舟月作



御所人形 水引手 京都国立博物館

2F-1 絵巻

【江戸時代の縁起絵巻Ⅰ】
1月2日(火)～2月12日(月・休)

【江戸時代の縁起絵巻Ⅱ】
2月14日(水)～3月24日(日)

2F-2 仏画

【新春特集展示】
辰づくし―千支を愛でる―
1月2日(火)～2月12日(月・休)

【涅槃図】
2月14日(水)～3月24日(日)

2F-3 中世絵画

【新春特集展示】
辰づくし―千支を愛でる―
1月2日(火)～2月12日(月・休)

【禅宗の人物画】
2月14日(水)～3月24日(日)

2F-4 近世絵画

【新春特集展示】
辰づくし―千支を愛でる―
1月2日(火)～2月12日(月・休)

【生誕290年 円山応挙】
2月14日(水)～3月24日(日)

2F-5 中国絵画

【蘇軾を憶う】
1月2日(火)～2月12日(月・休)

【明末の五百羅漢図】
2月14日(水)～3月24日(日)

1F-1 彫刻

【修理完成記念】
特集展示 泉穴師神社の神像
1月2日(火)～2月25日(日)

【平安時代の彫刻】
1月2日(火)～3月24日(日)

1F-2 特別展示室

【特集展示】 弥生時代 青銅の祀り
1月2日(火)～2月4日(日)

【特集展示】 雛まつりと人形―古今雛の東西―
2月10日(土)～3月24日(日)

※2月6日(火)から2月9日(金)は閉室。

1F-3 書跡

【装飾経―荘厳された仏の言葉―】
1月2日(火)～2月4日(日)

【京博130年の語り部】
2月6日(火)～3月17日(日)

※3月19日(火)から3月24日(日)は閉室。

1F-4 染織

【織物の美と技法】
1月2日(火)～2月12日(月・休)

【染織品と再利用】
2月15日(木)～3月17日(日)

1F-5 金工

【茶の湯釜】
1月2日(火)～2月4日(日)

【備前・備中・備後の名刀】
2月7日(水)～3月24日(日)

1F-6 漆工

【文房具―書斎を彩り、知を創る―】
1月2日(火)～2月4日(日)

【備前・備中・備後の名刀】
2月7日(水)～3月24日(日)

※2月6日(火)は閉室。

〈予告〉特別展

雪舟伝説

カリスマ

「画聖」の誕生

令和6年4月13日(土)～5月26日(日)

【主な展示替】 前期展示：4月13日(土)～5月6日(月・休)

後期展示：5月8日(水)～5月26日(日)

会期中、一部の作品は右記以外にも展示替を行います。

【平成知新館】

日本美術史上もっとも重要な画家の一人とされる雪舟(一四二〇～一五〇六?)。六件もの作品が国宝に指定されていることが象徴的に示しているように、雪舟に対する現在の評価は突出したものがありません。しかし、それは単純に作品が優れているという理由だけによるものではありません。雪舟とその作品に対し、歴史的に積み重ねられてきた評価の上に、今日の高い評価があるのです。

本展では、主に近世における雪舟受容を辿ることで、「画聖」と仰がれる雪舟への評価がいかにして形成されてきたのかを検証します。桃山時代に雪舟の後継者を自称した雲谷派と長谷川派、雪舟画風を流派様式の礎とした江戸時代の狩野派はもとより、これら漢画系の画家とは異なる実にさまざまな画家たちが雪舟を慕い、その作品に学びながら、新しい絵画世界を切り開いていきました。尾形光琳や伊藤若冲、曾我蕭白をはじめ、登場する画家たちは総勢三十名以上。時代を越え地域を越え、雪舟から何がしかを学ばんとする眼差しは、近世を通じて途切れることなく続いてきたのです。たとえるなら、雪舟をキーワードに近世絵画史という地層を縦に切ったとしたら、その断面にはどんな模様が見れるのだろうか。そんな関心から、この特別展は企画されました。

一口に雪舟受容といってもそれぞれ自体複雑な性質を孕み、多角的に把握すべきものです。その多様な雪舟受容を通して、「画聖」雪舟誕生の過程を明らかにすることを目指します。

(福士雄也)



国宝 秋冬山水図 雪舟筆 東京国立博物館 (通期展示)



富士三保清見寺図 伝雪舟筆 東京・永青文庫 (通期展示)



富士三保図屏風(左隻) 曾我蕭白筆 滋賀・MIHO MUSEUM (通期展示)

「ミュージアムパートナー」一覧

※令和5年12月末現在

京都国立博物館の賛助会員制度です。当館の活動について幅広くご支援いただいています。

「ゴールド」土屋 和之 / 株式会社SODIMZホールディングス / 株式会社 俄 / ZのEY株式会社

「シルバー」学校法人 二本松学院 / 東レエンジニアリング株式会社

「ブロンズ」原田清朗

「キャンパスメンバーズ」

※令和5年12月末現在

「京都国立博物館キャンパスメンバーズ」は、国立博物館と大学等との連携を図り、博物館が所蔵する文化財を核として文化や歴史を共に学ぶ場を提供する会員制度です。会員である大学や専修学校の学生および教職員の皆様には、当館名品ギャラリーを無料で観覧いただける機会などさまざまな特典を提供しています。

- 学校法人 瓜生山学園 / 追手門学院大学 / 国立大学法人 大阪大学 / 大阪大谷大学 / 大谷大学 / 学校法人 大手前学園 / 学校法人 関西大学 / 学校法人 関西学院 / 国立大学法人 京都工芸繊維大学 / 学校法人 京都産業大学 / 学校法人 京都女子学園 / 京都市立芸術大学 / 京都精華大学 / 京都先端科学大学 / 京都橘大学 / 京都府立大学 / 近畿大学 / 四天王寺大学 / 就実大学 / 成安造形大学 / 学校法人 大覚寺学園 / 帝塚山大学 / 学校法人 同志社 / 奈良大学 / 奈良女子大学 / 国立大学法人 奈良先端科学技術大学院大学 / 学校法人 二本松学院 / 花園大学 / 佛教大学 / 学校法人 立命館 / 龍谷大学

◆寄附

京都国立博物館では文化財とそれを守り伝えてきた先人の想いを次の一〇〇〇年へと繋いでいくため、広く寄附を募っております。このたび、左記の方より寄附をいただきました。寄附の趣旨を踏まえ、大切に活用させていただきます。

劉 嵩 様

◆京博オリジナルグッズに「トラりんボトル」が登場!

トラりんデザインのステンレスボトルが1月より発売されます。象印マホービンのとんとパッキンがひとつになった「シームレスせん」ボトルは、250 mLの軽量サイズ。トラりんボトルで環境にやさしいマイボトルライフをはじめませんか。



左: ミッドナイトネイビー 右: ソフトターコイズ

「茶碗の形」なり

京都国立博物館調査・国際連携室長 降矢哲男

近ごろ、茶の湯の茶碗に関する書籍の編集を行う機会がありました。それぞれの種類の基準作といえる茶碗を数多く取り上げながら内容を構成し、かつ新たな視点を取り入れて作品選定を行っていく作業は非常に困難を極めました。監修者、所蔵者をはじめとして多くの方のご理解、ご協力をいただき、なんとか刊行に至りました。編集作業の過程では、掲載がかなわなかったものも含め、数多くの茶碗を実見する機会があり、多くの知見を得ることができました。今回はその際に感じたことについてお話ししたいと思います。

今日まで伝来してきている茶の湯の茶碗をはじめとする名物茶道具について考えていく際、まずはその茶碗を手にして詳細に観察を行い、寸法や重さ、轆轤らくろび挽きの様子や胎土の状況、そして釉薬の掛かり方などを調査に記録していきます。また調査とともに様々な角度からの写真も撮影するようにしています。調査を行った後、その茶碗が桃山時代、江戸時代などにおいて実際に使用されていた場合、茶会などにおいてどのような位置付けをされていたかを知るために、文献資料などの記録をたどりながら、当時の状況を明らかにしていきます。そうした際の手掛かりとなるものとして、『松屋会記』や『天王寺屋会記』があります。各時代の茶人たちが、茶会において茶道具を鑑賞、観察した内容を記録した茶会記です。そのほかには『山上宗二記』など、茶道具の由緒や名称、形状、寸法などを記した名物記が挙げられます。

こうした調査を行うことにより、これまで感覚的に捉えていた寸法や色彩、質感などについても実証的に捉え、かつその茶碗が使用されていた当時の茶会の様子などもイメージすることが可能となります。加えて、これまでの先行研究から学んだ情報について、どういった経緯でそれらの文章が記されたのか理解することができ、自身が思い違いをしていたことがわかることもあります。実際に手にして初めて得られる情報も多くあり、調査の重要性を改めて痛感しました。そして、書籍に掲載した茶碗の半数以上が、現在も現役で茶道具として用いられているものであったり、個人コレクションをもとにした美術館の所蔵品であったことは、今なお茶人たちによって大切にされ、コレクションしたそれぞれの人物の深い想いを感じる機会にもなりました。

実は、こうした実感はすでに、『山上宗二記』をはじめとする桃山時代の文献にも記されています。このたび、編者として茶碗を調査し、一定の基準をもって分類を行うことによって、わずかではありますが、その思考を共有できたように思います。書籍に掲載する写真を選定する際、茶碗の形かたちについてよくわかるものを、と強く意識しましたが、それも、丹念に一つ一つの茶碗と向き合い、対話する機会を得たことで、よりよい選択ができたように思います。

これからも、研究者として「モノ」と向き合う機会を大切にしていきたいと考えています。

講座・イベント

《土曜講座》

- 1月13日(土)「泉穴師神社の神像」
京都国立博物館主任研究員 竹下 繭子
- 1月20日(土)「京都と弥生青銅器—研究の歴史と京博コレクションの形成—」
京都国立博物館研究員 古谷 毅
- 1月27日(土)「銅鐸の変遷と画期」
京都国立博物館客員研究員 難波洋三 氏
- 2月 3日(土)「ポータブルX線分析装置による
泉穴師神社所蔵神像の彩色材料調査」
京都国立博物館保存科学室長 降幡順子
- 2月10日(土)「京都国立博物館敷地の発掘調査」
京都市埋蔵文化財研究所調査研究技師 古閑正浩 氏 ×
京都市埋蔵文化財研究所調査課長 南 孝雄 氏 ×
京都国立博物館学芸部長 尾野善裕
- 2月17日(土)「備前・備中・備後の名刀」
京都国立博物館主任研究員 末兼俊彦
- 2月24日(土)「仏画の見方“芸術は理屈だ!”」
京都国立博物館教育室長 大原嘉豊
- 3月 2日(土)「古今雛は現代雛の原形か?」
日本人形文化研究所所長 林 直輝 氏
- 3月 9日(土)「唐代金銀器の諸相」
京都国立博物館館長 松本伸之
- 3月16日(土)「中国の羅漢図」
京都国立博物館研究員 森橋なつみ
- 3月23日(土)「江戸時代の縁起絵巻—展示作品を中心に—」
京都国立博物館主任研究員 井並林太郎

※平成知新館 講堂にて13時30分～15時に開催。定員 200名、聴講無料(ただし講演会当日の観覧券等が必要)。

※当日9時30分より、平成知新館1階インフォメーションにて整理券を配布し、定員になり次第配布を終了します。

《芸舞妓 春の舞》

日時：令和6年1月8日(月・祝)

午前11時～、午後1時～ ※各回約30分

場所：平成知新館 講堂 定員：各回 200名

参加費：無料(ただし、当日の観覧券等が必要)

参加方法：12月19日(火)10時より、ウェブサイトよりお申し込みください。事前予約優先制。先着順、定員になり次第受付を終了します。

https://www.kyohaku.go.jp/jp/events/event/20240108_spr-dance/

《留学生の日》

京都国立博物館では、留学生の方々に日本文化への理解を深めていただくため、「留学生の日」を設けています。今年度は令和6年2月25日(日)に実施します。留学生の方は、学生証をご提示いただくと、無料で名品ギャラリー(平常展示)をご観覧いただけるほか、多言語スタッフによるギャラリーツアーも予定しています。この機会にぜひご来館ください。

ギャラリーツアーの詳細・申し込みについては、ウェブサイトをご確認ください(1月下旬公開予定)。

<https://www.kyohaku.go.jp/jp/events/event/>

※名品ギャラリーの観覧は、事前申込不要です(受付時間：午前9時30分～午後4時30分)

これからの展覧会

- ◆特別展 ^{カリスマ}雪舟伝説—「画聖」の誕生—
令和6年(2024)4月13日(土)～5月26日(日)
- ◆特別展 法然と極楽浄土
令和6年(2024)10月8日(火)～12月1日(日)

展覧会やイベントの中止や延期、会期や展示期間の変更などを行う場合がありますので、最新情報については、当館ウェブサイト等をご確認くださいませようお願いいたします。

◇名品ギャラリーの休止予定

特別展とその前後を含めた期間は、展示作業等のため、名品ギャラリーを休止しております。ご来館の皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

名品ギャラリー 休止期間：12月5日(火)～12月24日(日)
3月26日(火)～4月11日(木)

※上記期間中は庭園のみ開館となります。

ご利用案内

[開館時間] <1月2日～3月24日> 9:30～17:00
* 金曜日は19:00まで開館

* 入館は各閉館の30分前まで

<3月26日～4月11日> 9:30～17:00

* 入館は閉館の30分前まで

[観覧料] 【名品ギャラリー】<1月2日～3月24日>

一般700円、大学生350円

* 高校生以下および満18歳未満、満70歳以上無料、障害者とその介護者1名は無料(要証明)。

* キャンパスメンバーズ(含教職員)は学生証または教職員証をご提示いただくと、無料となります。

【庭園のみ開館期間】

<12月5日～12月24日><3月26日～4月11日>
一般300円、大学生150円

* 高校生以下および満18歳未満、満70歳以上無料、障害者とその介護者1名は無料(要証明)。

* キャンパスメンバーズ(含教職員)は学生証または教職員証をご提示いただくと、無料となります。

* 有料(一般のみ)にてご入館の方には、庭園ガイド冊子がつきます。

[休館日] 月曜日(月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)、
12月25日(月)～令和6年1月1日(月・祝)

アクセス

JR=京都駅下車、市バスD2のりばより206・208号系統にて博物館三十三間堂下車すぐ

プリンセスラインバス京都駅八条口のりばより京都女子大学前行にて東山七条下車、徒歩1分

近鉄電車=近鉄丹波橋駅下車、京阪電車丹波橋駅から出町柳方面行にて七条駅下車、東へ徒歩7分

京阪電車=七条駅下車、東へ徒歩7分

阪急電車=京都河原町駅下車、京阪電車祇園四条駅から大阪方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩7分

駐車場は有料となっております。ご来館の際は、公共交通機関をご利用ください。

*「博物館だより」を郵送ご希望の方は、返信用封筒(角2封筒は120円、長3封筒は94円)切手貼付、宛名明記)を同封して、当館企画室までお申し込みください。



〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527

TEL. 075-525-2473 (テレホンサービス)

公式サイト

<https://www.kyohaku.go.jp/>

X (旧 Twitter)・Instagram

@KyotoNatMuseum

公式キャラクター・トラリンサイト

<https://www.kyohaku.go.jp/jp/torarin/>

発行日 令和6年1月1日 デザイン 谷なつ子

編集・発行 京都国立博物館 印刷 岡村印刷工業株式会社

京都国立博物館
KYOTO NATIONAL MUSEUM

